

Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No. 1

31 March, 1994



Message from the new British Council director, Mr. Michael Paul Barrett, OBE

My wife and I are delighted to be back in Japan for our third British Council posting. We were first here in 1970, when I was presenting a weekly English programme on NHK television. Our second stay was from 1980 to 1984. This was an exciting stage of development as we began to emphasise Britain's contemporary culture and reach out the younger generation in Japan.

Since then, the British Council has acquired a new building in Tokyo, English language school in both Tokyo and Kyoto and expanded activity in Kansai. We even have a small collection of materials on study in Britain and Okinawa. I look forward to building our links with institutions all over Japan.

We now handle or assist over 400 scientific exchanges each year; 150 British arts events; 27,000 enquiries about studying in Britain, teaching English to over 3,000 students; and provide library and information services to thousands of British Council members and others.

One of our priorities now is to develop an interdisciplinary approach to "British Studies" among all those who have an interest in British life and thought. We want to involve social scientists, historians, economists, philosophers, lawyers, and others so as to deepen and widen the intellectual exchange between our countries. Last year, we held our first, very successful conference. Next, we are planning workshops on course design. This is an area where our friends in the BCJA can give us valuable advice and help, and we count on your support to develop "British Studies" in every form.

We look forward to seeing you at BCJA events

over the coming year, and I hope that you will find time to call on us occasionally.

「ニュースレター」の創刊に寄せて

Chairman of the BCJA 安東伸介

「留学」という言葉はかつて極めて重い意味を持つものであった。福澤諭吉の欧米体験は、いわゆる「留学」とは違った形のものであろうが、その体験の背後にあった熱い「志」というべきものは、明治以後の日本人留学生たちの胸中に、大正・昭和と時代は移りながらも共通するものであったと思う。福澤は渡欧の際に江戸で頂戴した支度金は、残らずこれを書物の購入に当て、「現物一物も持ち帰らぬ所存に御座候」という書簡を残している。それは、およそ遊山とは無縁の、純粋な知的探求を志した西航であった。

ブリテッシュ・カウンシルが、戦後はじめて日本の留学生を英国に送ったのは、昭和二十六年のことだったと記憶している。その頃、英国への留学が、いかに重い意味を持つものであったか、それを最も良く知るの、当時の留学生自身であろう。

ブリテッシュ・カウンシルが日英の文化交流の上で果たした功績は多彩、広範な分野に亘り、真に優れた人材を年々送って貴重な英国留学の機会を与えて来た努力は、その功績の筆頭に挙げて良いことであろう。B・C・J・Aはこれらの留学生を中心に、かつて英国に学び、今日も英国の学術・文化に変わらぬ深い関心を持つアングロファイルズを糾合した団体である。多くの会員たちは、単なる留学時代へのノスタルジアによって結ばれた親睦団体に甘んずることなく、多様な形で英国研究の将来の可能性についても深い関心を抱いている。昨年成功裡に行われたカウンシル主催の「ブリテッシュ・スタディーズ」のセミナーに、B・C・J・Aが協力を惜しまなかったのも当然のことであろう。今後も、その役割は多岐に亘ることであろうが、会員の一層の精神的結合をはかる上で、このたび漸く創刊の運びとなった「ニュースレター」の意義は誠に大きく、その将来の発展が大いに期待される。「ニュースレター」の刊行は私たちの長年の夢であったが、言うは易く行うは難いこの種の企画が、多くの会員諸氏の協力と、安藤正人、平 孝臣両氏の文字どおり献身的な奉仕によって実現したことを喜び、心から感謝の意を表したい。「ニュースレター」の充実、すなわちB・C・J・A自身の充実、発展であることを信じ、会員諸氏の一層の協力をお願いしたいと思う。

私は、一九六二年に英国文化振興会（以下BC）の奨学生としてイギリスに渡った。BCが戦後の日本で活動を始めたのは一九五一年、五一年に第一期生六名が送り出されたというから、私は十一期生ということになる。前年六一年に応募した時には二八才で、二八才から三五才までという応募年齢の枠に入ったばかりであった。（1951年当時は英国大使館がBCの仕事をやっており、BCとして正式に発足したのは1953年のことであった—この点については、わがBCJAの有能な書記吉田和子さんの御教示を得た。）

私に応募を強く奨めてくださったのは、東大法学部で御指導をいただいていた福田欽一先生（現在、明治学院大学学長）で、先生御自身は一九五七年組であった。「ブリカン」の奨学金はアメリカのフルブライトと違って出来上がった研究者にしか出ないと聞かされており、たしかにBC奨学生の中にはそれぞれの分野での大物の先輩が何人かいるようであった。だから採用が決定された時には、自分の道で一応研究者の末席に連なれるようになったという気持で大変に嬉しかったものである。それ以来、いつも末席に連なっていると思ってきたので、今回、このニューズレターの創刊号に「草分け」期の思い出などを書けと言われて驚いている。思えば年を取ったものだ。

思い出すままに記しておく、奨学生試験は英語と面接の二度であった。英語の試験は作文、書取り、会話の三つ—作文は「電話」などの簡単な単語が十ばかりあって、それぞれについて短文のエッセイを書くもの。書取りはヴィトル（食物）とかリセブテイクル（容器）など、意地の悪い単語が混った文章をノートするものであった。後になって知ったことだが、壇の上でその文章を読んだのは当時のブリカン代表のトムリンさんであった。会話の試験では、部屋に入っていったら「どこから来たか」と訊かれたので、「隣の待合室から来た」と答えた。相手があわれみを込めたような笑い—のように見えた—を浮べて、「どこで生れたのか」と訊き返したので、大失敗だと判った。二次の面接は、もっぱら研究計画について尋ねられたがこれはきちんと答えられた。もっとも、イギリスに実際に行ってみると、その研究計画は直ぐに断念することになった。口頭試問はもっぱらトムリンさんがやったが、共同通信の牧方三郎さんがスポーツはやるかと尋ねられたのを覚えている。ラグビーをやりたいと私は答えた。

出発は七月末、P&O汽船のカントン号で横浜から出航した。それがカントン号の最後の航海で、その直後に香港で解体されたと聞いた。このニューズレターが出るのを機会に確かめたいことであるが、もし六三年組が飛行機で渡英しているとするれば、私たち六二年組は船で渡った最後の組ということになるであろう。横浜を出て、清水、神戸に寄ってから日本を離れるというゆったりした旅で、九州を後にして間もなく沖合から見た沖縄は、まだアメリカの統治下にあった。衰えたりとはいえ大英帝国はまだ存在しており、香港、シンガポール、ペナン、ボンベイ、アーデン、スエズ、ジブラルタルと帝国の寄港地を一つひとつ訪ねていった。ちょうど三〇日でロンドンに着いた。一九五六年のスエズ動乱の時エジプト側が運河に船を沈めて航行を阻止しようとしたので、それ以後、運河が再開されるまでの数年のブリカン奨学生は南アフリカの喜望峯回りで行ったと聞いているから、もっと長くかかったに違いない。これも教えていただきたい点である。

ロンドンでは、数日がかりのイギリス生活への適応のためのコースがあった。ロンドン大学の社会学の教授が人口構成の歴史的变化を説明して、「召使い」という階級がほとんど消滅したという。ブリカン派遣の女性の講師が、それを受けて、だから下宿ではお皿洗いを志願すると喜ばれるという。しかし、最初に訪ねた時には大事にしている皿を使うかもしれないから、

その場合にはしばらく様子を見ろとか、便秘の薬には何がいいとか、国民医療保健制度の説明とか、まことに懇切丁寧な御案内であった。議会の見学や観劇もあった。世界各地から集ったブリカン奨学生と一緒にコースであったが、日本人は夜の懇談の討論などから脱走して、中華料理を食べにいったりするというので一時は評判が悪かった。

私だけに限ったことではないと思うが、適応に苦勞したのは第一に食物、第二に英語—特にロンドンのコクニー・アクセントの英語であった。日本で西洋料理なるものに慣れていた筈なのに、何故あれ程適応に苦勞したのか、いま思うと不思議である。すでにカントン号の船上で、神戸育ちの日英混血の少女が「掌におしようゆを一しずくおいて、すすってみたい」と言い出して、なるほど言い得て妙と感心した。ドーヴァー・ソールは今では珍重しているが、船上では「どぶ草履」と悪口を言っていた。ビターのビールは、今ではイギリスに着くと直ちになつかしく賞味することにしているが、当時はなかなか馴染みにくかった。

ロンドンの下宿でお内儀さんから最初に尋ねられたのは、「パイコン」を食べるかという質問であった。それはロシア料理かと訊き返したが（パイカル湖からの一瞬の連想であった）、ベーコンのことで、こちらがイスラム教徒ではないかと配慮してくれたのであろう。道を尋ねて「タイク・ゼイ・マイン・ウアイ」と教えられ、「マイン・ウアイ」とは地下道のことかと思っ歩き出したが、いくら歩いてもそんなものではなく、「メイン・ウェイ」のことと判ったころには、すでに何マイルも歩いていた。あのように猛烈なコクニーは今ではオーストラリアでも聞けそうにない。

古き良き日のオックスフォード生活のこととなると、思い出の流れはとどまりそうにない。二年間の留学を終えて帰国するとなった時、この国、この大学をもう一度訪ねてみたいというのが痛切な願いであった。帰国して就職した時の助教としての月給が五万円足らず、イギリスへの往復航空運賃は六〇万円以上、つまり年取に相当していたから、最初のイギリスへの旅はいわば月旅行のように貴重なものに思えたのである。たしかに貴重な経験であった。

(KAWAJI Hidekazu、学習院大学法学部、オックスフォード大学 1962)

第2号を出すのは

原稿大募集！！

《エッセイ》

留学の思い出、最近のイギリス、書評や演劇評、そのほか日本と英国に関わる話題なら何でも。本誌半ページから1ページ分位まで。

《旅行通信》

あなたの近況をハガキ1枚でお寄せください。ほかに、催物の案内、本の宣伝、アピール、たずね人・・・何でも結構ですから、お気軽に。

★日本語か英語で。お名前・ご所属明記。

★締め切りは1994年6月末日。

★《送り先》BCJA事務局ニューズレター係

もう10年以上も前の研修の思い出の一端をここに書くのは、それより以前ケンブリッジで学んだことと合わせて、更に私の教壇生活を豊かにされ、現在、現職を退いても1年おき位にイギリスへと誘惑を絶ち切れない思いの原動力となっているからである。不幸にも平和とは程遠い時代に学んだ英文学の研究の不十分さを、もっともっと限りなく補いたい思いがまだ心の中に疼くゆえかも知れない。

参加者は、アルジェリア、ブラジル、ブルガリア、フランス、ドイツ、ギリシャ、ハンガリー、インド、イラク、ポルトガル、イタリー、スペイン、スイス、ユーゴスラビア、日本などの国々から60名。そのうち日本からは私1名のみ。10年も経つうちに、各国の事情も変化して、戦いあり、分裂あり、災害あり、ここで知り合った英語教師の方々の中にも不幸な戦禍に見舞われたり、命がけの経験をされたり、さまざまと思う。我が国の平和を感謝して、英語のテキストや教育の設備さえ無い中での英語教育の困難さを切々と訴えておられた熱心な発展途上国の教師の方々その後の身の上を案じている。

Stirlingとは、Edinburghから北西へ60km。フォース川を見下ろす丘にあるスコットランドの古都である。スターリング大学は、この地方としては近代的な建物で、神秘的にそびえるウォレスの記念碑のある丘をバックに大きな人工湖と美しい緑がなだらかに広がっている学舎である。私がなぜこのコースを選んだかは、何よりもスコットランド語に接したいこと、そしてネス湖へのツアーが含まれる事だった。

ロンドンのユーストン駅から列車で約7時間。私にとっては2度目のスコットランドであるが、東京での混雑と忙殺の日々を逃れる身には、飽きることのない平和な田園風景である。道路沿いのバターカップのかわいい花の行列や、ヒースの丘、羊や牛の、のびやかな姿を眺めながら、乗客のスコットランド語に耳を傾け、まどろむ事も忘れ、そのすべてを心の糧にしたいと願いながらスターリングの駅に着く。花で飾られた小さい美しい駅であった。

Informal Sherry Partyによって研修がはじまる。各国からは数名ずつ参加しているのに日本人は私一人。どの先生も遅くまで遊び、朝は早い。そのくせ誰も授業中居眠りはしない。「日本人は」とまるで日本人すべてを代表するように評されるのはいやだから私も負けずに頑張る。居眠りどころか、授業中は真剣な質問がひきもきらない。知識欲に溢れる一人一人である。各種のアクセントを聞くだけでも面白い。夜は古城の中でのバグパイプの音に合わせての踊りの輪の中に溶け込む。戦時中に過ごした灰色の青春を一気に取り戻すかのように、そして周囲の目を気にせず、年齢も忘れ国際的な仲間とともに時を過ごし帰寮してからまた同じ階の仲間が集まってお国自慢や持参のシェリーなどでにぎやかに1時、2時まで過ごす。短時間とはいえ、ストレスを完全に解消して早朝に気分よく目覚める。

日々の勉強の主なものは次の通り。

Self-directed Learning, Rhetoric, Micro-Teaching and Teaching English as a Foreign Language. Optional

Tourは次の通り。Edinburg Loch Ness, Trossachs and Loch Lmond, St. Andrews

Micro-Teachingの授業の一つの中でスキットとして、私はジェスチュアで「妻がホテルの一室で浮気をしているのを見つけた男が銃でその妻の浮気の相手を撃ち殺すシーン」を演じ、他の人にそれを当てさせるというのがあった。とにかくヨーロッパの人の名前を覚えるのに一苦勞。指名するのも容易でない。とっさに出て来ない。その点私の「ヨーコ」は覚えやすく散々指名されるので閉口。11教室のテーブルでの勉強などは、スコットランド語はもとより、アイルランド語、ウェールズ語など出てきて大変。たまにアメリカ英語が出てくると自国語に接したようにほっとする。Rhetoricの授業はイギリス人の教授のため大

変分り易く内容も私には興味があった。

午後の自由時間は図書館で宿題をしたり、予習をしたり、またスターリングの街に一人で出かける。タータンチェックのスカートの男性から違和感を与えられないほど、歴史と風土がマッチしている。現在残るスコットランドの典型的な家屋（アーガイルの宿）が印象的。その昔、王室の人達の住まいだったと言われ、今はユースホステルとなっている。マールの建築といわれる16世紀の屋敷も目をひく。夕食後の林の中の散歩も楽しい。日の長いイギリスの夕暮れは静けさと神秘に包まれ、故国での雑事は、黄金色の彼方に吸いこまれ、人間を取り戻し、魂を蘇らせてくれる。

スターリング大学では、Open Universityというのがこの時期行われている。日頃通信教育を受けている人達の集申授業である。体の不自由な方、一家の主婦、高校生の子を持ち、自らは美術の学位を取ろうとする母親、70歳を越えた方の更に深い学びへの挑戦、これらの方々とは食堂では一緒なので、向学心の刺激となる。環境も年齢も学問の障壁でないとの実感の中で、楽しい会話と、美しい空気のため、いやが上にも食欲旺盛となる。

念願のネス湖とインバネスの町への訪問も私にとっては、一生の心の宝となる。長いバスの旅もヒースの一面のピンクに目を奪われ、北の果ての神秘とロマンに感動し、ハイランドの詩情を歌ったバーンズの心を目で確かめ、グレンウルクハートの城跡を見つけその18世紀中葉の古戦場や、水、月、太陽にまつわる伝説、迷信などに思いを馳せるとき、ネッシーの存在も単に夢想と思えない感じがして来る。インバネスは人口約35000という小じんまりした静寂そのものの町である。古い建物、聖アンドリュース教会、ネス湖につながる川の流れ。観光客、まして日本人は皆無。自らがここにいることが奇跡のように思える。セントアンドリュースの町といえど、ゴルフ通の人は一度は行って見たいと思う程ゴルフで知られているが、かつて宗教活動の中心地であった。ジョンノックスがたてこもって嵐を巻き起こした聖アンドリュース城がある。殉教者の魂を包む寺院の遺跡もあり、フォース湾を見下ろしている。ひそかに歴史をささやくこの場所も、海と静寂の中に何かを語ろうとする草花や木々が小さな存在である私を見出させてくれる。

この短期面の研修で英語教師としての学びは勿論のこと、まことに大きな糧を与えられた。スターリング大学のキャンパスで苗木の手入れを早朝からしていたおじさんの言葉が忘れられない。「何百年もたって、あなたのような外国人がここを訪れる頃のために、私は木の手入れをしています。人や生き物を育てるには忍耐と、長い目が必要ですよ」と。一国の文化の成長も、平和の世の建設も、一人一人の教育も、自分の学問や教養の成長も百年という覚悟で取り組まなければならないと教えられた。教師として、また一人の女性として、更に学び、更に孫や子に心の伝統を残し育てなければならぬ。この研修が単に命の充電としてだけでなく、新しいスタートとして豊かにされたことを今もって感謝している。

単に英語の研修に終わらせてはいけないとの思いを深くさせられたブリティッシュカウンシルのコースへのチャンスを与えられ、10年経てもなお昨日の如く生き生きと、その後の何回もの訪英の、どの経験よりも純粹に心の泉となって、バグパイプの昔色や、美しい白鳥のいる水や、緑にあふれる丘の彩りと音と共に私の中にフィルムとなって取まっている。

広本勝也

映画「橋の上の貴夫人」(The Bridge)はヴィクトリア朝時代のヤーマスが背景になっている。橋の上にたたくむ子連れの既婚女性が男子学生と出会い、ひと夏の恋を経験する物語。ヒロインの幼い子どもたちは、びゅーびゅー吹く風の中で、小さなpailとspadeを持って、砂のお城を作る……。

ヤーマス(別称グレート・ヤーマス)は、イングランド中部ノーフォーク川イニエア川の河口に位置し、北海に面している。長々と続く、やや灰色味を帯びた白い真砂の浜。海岸沿いに風変わりな低層の建物が並んでおり、避暑地向きの娯楽施設やホテルなどが多く、19世紀に栄えたその名残りをとどめている。1848年大晦日には、文豪ディケンズがこの港町を訪れ、「世界中で最も奇妙な場所」として、長編小説「デイヴィッド・コパーフィールド」の漁師ベゴティ一家の住む土地の風景描写に取り入れたことでもよく知られている。

今から十年ほど前、ケンブリッジでの一年間の留学生活が終りに近づき、夏休みに入ったある日、大学一年生のマーク、その妹で15歳のジェーン、日本人留学生のケイ、そして私の四人が、市内のバス停トラマー・ストリートから午前10時45分発の長距離バス「ナショナル・エクスプレス」に乗り、ヤーマスに着いたのは午後1時半のことであった。

まずマーケット・プレイスで私の注意を引いたのは、貝殻やキャンディーやけけばけいしものを売っているいろんなみやげ物店だった。「海辺の樺あめ」(Seaside rock)だけの専門店もあり、大小色とりどりの甘いあめが並んでいて、中には直径20センチのばかでかいものもある。これは金太郎あめと同じで、どこを切っても同じ模様が出てくるが、金太郎のかわりに「Yarmouth Rock」という文字が、ピンクや赤で入っているのである。

浜辺に出ると、いくぶん強い風が吹いていた。日本ではビーチ・パラソル、フランスでは木の椅子があるが、ここではビニールのシートで塚を作って、風よけにするウインド・ブレイカーが、あちこちに見られる。

私たちは広い砂浜の真ん中にすえられたベンチに腰掛けると、昼食用の弁当箱を並べてサンドイッチを食べることにした。空には飛行機雲が糊引き、明るく晴れているのに日差しは柔らかく、一度脱いだセーターを肩に掛けている婦人もいる。夏の海岸ではどこでも、水着姿で甲羅干しをしている人たちがいるはずだが、ここでは皆無だ。食後、果てしなく続く砂の上を潮風に吹かれて歩いていくと、ファンフェア(遊園地)に出て、回転木馬や観覧車などがあつたが、遊んでいる子どもたちは少ない。ゴーカートやミニゴルフなどの遊び場もある。モデル・タンク(大型の模型戦車)を操作し、相手の戦車にぶつけて遊ぶ所があり、ジェーンがやってみたいと言うので、そこでしばらくゲームをした。

そのあと大通りに出ると、カンテラ風のランプの付いたponycarriage(一頭立て四輪馬車)が何台も並んでいたが、御者は赤いタータン・チェック模様の客席に座って、所在なさそうな様子。一人1ポンド50ペンスとのことで、マークが拒絶反応を示し、私たちはこれには乗らず、テニスコートで一時間ほどプレイすることにした。ハワイやガム島と違って、太陽はもの憂げで、7月下旬なのに初秋といってもいいほどだ。イースト・アングリアのひなびた海辺でするテニスは、何とのかで単調なリズムを刻むことか。

テニスで軽い疲れを覚えたあと、再び商店街の方に向かうと、広場でオルガンの演奏に合せて、賛美歌をうたっている一団の人々に出くわした。「あれは、土曜礼拝だ」(That's Saturday afternoon service.)とマークが教えてくれた。私たちは集会礼拝のテントの中に入って、紅茶を飲むことにした。お湯が熱く、ティー・バッグもやや大き目で、深みのある柿色のおいしい紅茶が飲めるのは、やはり日本と違う。ティー・ブレ

イクのあと、この信徒たちの教会に行ってみると、St. Johnという聖人の木乃伊が横臥の姿勢で安置されていたが、けっして無気味ではなく、「メント・モーリ」(死を忘るなかれ)の荘重な気分させられる。

こうしているうちに青空に白い月が現われ、夕日の番の色が加わる兆候が見え始めた。それで近くのホテルのレストランに入り、みんなで「日替わり定食」(Day's special)を注文した。メイン・ディッシュは土地の特産、薫製にしんで、ジェーンも嬉しそうだった。Peach色の白い肌で金髪の彼女は、典型的なイギリス娘。No curry. No spaghetti. (カレーライスもスパゲッティも嫌い)で、英国料理しか食べないのだ。

ノーフォーク州の海岸に沿って、ヤーマスから北へ約5キロ行くと、ケイスター・カッスル(Caister Castle)という町がある。そこにはサー・ジョン・ファストルフ(Sir John Fastolf)が15世紀に造ったレンガ建ての城趾があり、近くには約27メートルに及ぶ巨塔がそびえ立っている。シェイクスピアの有名な喜劇的騎士フォールスタッフは、この人物からその名前をとられた、という。だが、私たちがそこを訪れるのは、またの機会に譲らなければならなかった。

イングランドではヤーマスは北部のブラックブルと並んで、夏の保養地として知られているが、最近、イギリス人はもっと強い太陽を求めて、ギリシャやスペインに出向くようである。私がrun down(さびれた)ということばを、マークから聞いて覚えたのはこの時だった。カメラをぶら下げた観光客は一人もいなかったが、寂寥感のあるこの海岸の雰囲気、私には心地よかった。

私はそんな気分酔っていたのだが、ケンブリッジへ戻る直行バスに乗り遅れ、マークはぶりぶり怒り出した。ともかく時間をつぶすために、私たちはスナックに入った。間口の狭い所だが、ステンレス製の長いカウンターがあり、ポークパイなどを暖めて出してくれるのもイギリス的だ。

やがて午後8時5分発のバスに乗り込んだあと、私はサーカス小屋ののぼりが、黄昏の中に次第に遠去かっていくのを窓外に眺めて、哀愁を誘われたいわけにはいかなかった。

(HIROMOTO Katsuya, 慶応大学理工学部)

白己紹介と英国滞在記

小沢 博

1991年の秋から一年間、Visting Fellowとしてケンブリッジ大学 Clare Hall 校に滞在しました。10月1日に日本を立ち、3日にコレッジのファミリー・フラットに入ったのですが、旅の始まりのこの3日間が大変でした。ことは1歳2ヶ月の息子が成田で熱を出したことに発します。医務室での診察に予想以上の時間がかかってしまい、空港内を奔走、走り始めたバスに飛び乗るようにしてわがBAに駆け込み、機内では床に毛布を敷いて薬を飲ませながらの渡英となりました。40度近くまで上がった熱は頼みの網の坐案を使っても下がらず、以後、ヒースロウ空港内での診察、ロンドンのホテルでの往診、ケンブリッジのホテルでの往診・通院と続きます。文字どおり医者のはしごでコレッジにたどり着いたときには、睡眠不足と時差と緊張の連続で、さぞ見るも哀れな風体だったのではないかと思います。キッチンのおばさんがわざわざフラットまでランチを運んでくれました。その味と(虹鱈のグリルでした)、このときの安堵と感謝の気持ちは、今でも昨日のことに思い出します。一同がダイニング・ホールに会し、たっぷり1時間以上かける毎日の食事が、コレッジでの生活の重要な儀式であることを後で知り(Clare Hallのような新しいところでもその精神は生きています)、一家の受けた例外的な厚意の大きさを改めて噛みしめたものです。これが、わが家のコレッジ・ライフの始まり、「食初め」となりました。

ケンブリッジへは、「ユートピア」の作者トマス・モアを中心とする劇作家サークルの資料を集め、John Rastell(モアの義

弟、劇作、出版、劇場運営をてがけたヒューマニスト) 論の準備をするつもりで出かけたのですが、Dr Richard Axton (Christ's College) の指導の下に、講義漬けの一年を過ごすことになりました。振り返って、「若いときの留学は図書館にこもるべからず」という師の助言の正しかったことを確信しております。日本ならばガラスケースの中に陳列されているような稀釈本を手にしての書誌学の実践的訓練や、当初4、50人もいた学生が最後は8人程になっていたラテン語の演習など、コレッジと講義を自転車で駆け回ったあの一年の充実感は、生涯忘れがたい思い出です。

帰国後一年がたち、懐かしい日本の生活に戻りましたが、イギリス人の辛抱強いゆったりとした時間の感覚には、学ぶべき深い経験の哲学があるように思われます。車から降りてブッシュチェアーを組み立ててくれた路線バスの運転手や、暖かいユーモアを交えて患者を励ましてくれる医者、通りすがりの東洋の子にキャンディーをくれた庭いじりの老人など、イギリス的時間の中でしか発酵しない非能率的にして愛すべき資質が、確かに彼の地にはありました。

(OZAWA Hiroshi, 東北大学文学部、Cambridge大学 1991-92)

レディング滞在日記

福島佐江子

1992年3月31日、生まれてはじめてイギリスに降り立った。ヒースロー空港でレディング行きのバスが出てしまったばかり。次のバスを待っている間、人気もあまりなく不安だった。無事に次のバスでレディング駅へ。そこからタクシーに乗り、レディング大学の寮であるHillsideへ向かった。このHillsideはレディング大学の寮の中で一番いいと知人に聞き、申し込んであった。「一番いい」というのは比較の問題であることを後で知る訳だが。まず部屋に案内されて驚いた。小さな窓が一つあるだけの暗い部屋。天井や部屋の隅にはくもの巣。しみついたカーペット。右も左もわからない異国でみじめな気持ちになった。この時間じ察にいたスイス人の友達は、私がこの日 "I was shocked." を連発していたと後に語ってくれた。この寮は自炊であった。つまり、この時ちょうどキッチンにいたインド人の住人が彼の夕食を少し分けてくれた。お陰で私は何とか空腹を満たすことができた。三月末のイギリスは日も暮れるとまだ寒い。部屋の暖房の入れ方がわからなかった。今度はフィンランド人の友人が来て教えてくれた。これが私のレディング滞在の第一日目。くもの巣を払い、掃除をして、荷物を片づけてお風呂に入った。バス、トイレも共同。お世辞にもきれいだとは言えない。すぐ前に誰かが入れればお湯はでてこない。そのうち暖かくなるだろうと思ってしばらく我慢していても冷たくなる一方。湯水のごとく使うという表現があるが、湯水は貴重品なのである。

物質的には豊かさになれてしまっている日本人が多い昨今、このHillsideでの生活は、本当の豊かさとは何か、大切なものは何かを改めて教えてくれたような気がする。

(FUKUSHIMA Saeko, 都留文科大、University of Reading 1992/93)

グリニッジ詣で

木村精二

シティから東におよそ10キロ、テムズ河沿いの南側に緑豊かなグリニッジ公園が広がっている。その小高い丘の上に、1675年チャールズ2世の命で、航海術と天文学の発達に寄与すべく、王立天文台が誕生した。歴代の台長らは、その科学施設を駆使して、ヨーロッパの中でも一、二を争うほど優れた業績を残した(一つの例として、1884年の国際会議で、世界の経度の原点たる本初子午線がこの地に決まった事を挙げておこう)。創設

から満3世紀以上を経た今日、既に同天文台はロンドンの光客と塵埃を避けて遠くに引っ越したが、その跡には、17世紀当時の姿を残す煉瓦造りの建物が、国立海事博物館の一部として生まれ替わり、毎日多くの見学者を迎え入れている。

かなり昔のことになるが、東京都の職員として、英国公務員制度の調査研究を命じられた筆者は、東京およびイギリス各地のブリティッシュ・カウンシルから、本来目的のための様々な便宜を図っていただいたほか、天文や音楽といった趣味の分野でも、たびたび御世話になった。留学生センターOverseas Student Centreが主催する低廉な料金のバスツアー等の利用を勧められたのもその一つで、異国に不案内で貧乏な研修生(何しろ£1=¥1012の時代)の身には、こんな有り難いことはなかった。ある秋の日、正確にいうと1965年10月16日、グリニッジ巡りのガイド付き日帰りバスハイクに参加した。丁寧な説明のあと、カティール・サーク、王立海軍大学などと合わせて見学させてもらったのが、上記の国立海事博物館であり、長い間の念願がこうして叶えられた喜びは大きかった。初めて体験したグリニッジの丘からの展望・クインズハウスを中心として後ろに広がる可並みは、喻えようもないほど美しく、そのあと半年のロンドン滞在中、名物のダブルデッカーに乗って、何回ここを訪ね、合わせて旧天文台の展示品に接したことだろう。

ロンドン中心街からグリニッジまでの足は、列車かバスであった。バスのルートは53番で、オクスフォード・サーカス近辺から約4シリング(200円ほど)だったと思う。1974年に再訪したときもバスの番号は同じで、料金は25ペンス(170円)、通貨の呼称も換算率も変わって、円で比較するとむしろ安くなってしまった。その後は、天文台創立300年記念シンポジウム、ハレー彗星接近特別展、天王星発見者として知られたハーシェルの生誕250年祭などなど折りにふれて、グリニッジ詣でが続き、ある時はタクシー又は列車を利用したこともあるが、乗り慣れたバスが、やはり最も安心できる。つい先頃、航海時計の発明者ハリソン生誕300年記念の特別展を見に行ったときも、バスルート・ナンバー53で、料金は1ポンド60ペンス、260円そこそこだった。日本では交通費(に限らない)が、30年前より1桁以上も値上がりしたことを考えると、申し訳ないような、料金である。

グリニッジへの交通機関といえば、開通してから数年とは経っていないドックランド軽電線 Docklands Light Railway (DLRと略す)に触れなければ片手落ちであろう。地下鉄のタワー・ヒル、および先年オープンしたバンク駅から、その名の通りドックランドを抜けてアイランド・ガーデンズ駅およびストラトフォード駅を結ぶ、高架の無人電車である。アイランド・ガーデンズ駅を降り、テムズの河底を地下トンネルでぐり抜けて地上に出れば、カティール・サーク号と海事博物館は目前だから、途中で交通渋滞に巻き込まれるおそれのあるバスより、早く確実にグリニッジ行きができるようになった。料金はバス、地下鉄、軽電線共通の一日乗車券 One Day Travelcard を使えば、とても経済的である。昨年(1993年)の秋には、更に分岐点ポブラー駅から東に延長され、ロンドン市空港 London City Airportの最寄駅を経て、ベクトン駅まで開通したという。

コンピューターなど最先端の科学技術を使って開発された無人電車と、30年以上(恐らくは数十年間)経っても変わらぬバス・ルートの番号のことを比較してみると、これこそイギリス人の一つの気質、つまり頑くんに現状を守って容易に変えまいとする一方、古さを捨て最新式のものに憧れ積極的に取り入れるという、相反する二面性を合わせ持った生き方の典型のように、筆者は思えるのだ。

〈付記〉全く私的なことですが、ロンドンのプリカンで御世話になって以来、欠かさず新年の挨拶状を交換しているペイントン夫人 Mrs. O. Paynton, Programme Organiser of the British Council in London とは、未だに再会のチャンスが到着していないのです。

(KIMURA Seiji, University of London, 1965-66, 76)

野元正弘

私は1984-1986年にBritish Council ScholarshipによりロンドンのInstitute of Psychiatry, King's College HospitalのDepartment of Neurologyに留学しました。ロンドンに着いたときは丁度炭鉱の長期のストライキ中でサッチャー首相がこの炭鉱ストに妥協しないことを繰り返して演説していました。これ以前に郵便とBritish Railwayの改革を終えており、サッチャリズムがよく話題になっておりました。今年(1993年)11月にサッチャー元首相の講演会が鹿児島で開かれましたが、歯切れの良い元気な声を懐かしく聞くことができました。イギリスに着いて最初の8週間はロンドンの東にあるColchesterで英語学校に通いました。英語の授業はどこで受けても眠くなるもので日本で受けるのと大きな差はありませんでしたが、他の国々特にバングラデシュやアフリカから来ている彼等の少々通じなくても慣れて話し続ける英語の迫力に圧倒され、英語が言葉という道具であることを実感しました。また彼等は失語症ぎみの私の英語をていねいに聞き取ってくれ良い先生になってくれました。下宿先の老夫婦とその近所の方々との交流もとても良い思い出になり、親しくなると英語もなぜか少し楽に通じるようになりました。

10月になりロンドンの研究室へ移りました。Department of Neurologyは約40人が仕事をしていましたが公務員としてのスタッフは教授、助教授と秘書のみで残りはすべていわゆる非常勤で人の動きは毎年激しいものがありました。40人のうち私たちのような外国からの研究医が約10人で、ヨーロッパ各地、アメリカ合衆国、台湾、南アフリカと多彩な集まりで、いろいろな国の人と話ができた情報の交換ができました。このとき一緒に研究した人達がそれぞれの国で活躍しており、研究会に出席したときに会えるのを楽しみにしています。Departmentは皆良く仕事をしていました。教授が朝時過ぎに出勤し、夕方は8時半ころまで仕事をしていました。研究グループは臨床、電気生理、薬理の3つのグループがあり、私が所属していた薬理は朝が早く7時半ころにはだれかが実験を始めていました。皆よく仕事をしており、どこの国であっても世界をリードするグループは似たようなものでした。このときのDepartmentのスタッフの研究への姿勢と方向を決める時の感覚はその後の私の仕事に大変参考になり、今でも何かを計画するときは当時を思い出しています。また時には手紙を書いて意見を聞いています。

日本に帰り10年近くなりますが、今でも朝は紅茶を飲み、イギリスのことには自然と力が入りしばしば同僚にからかわれてしまいます。最近では衛星放送でBBCのニュースが聞けるようになりましたが、時々当時ブラウン管で見覚えのあるキャスターが出ますのでこれも楽しみにしています。

(NOMOTO Masahiro, 鹿児島大学医学部)

Farewell Oxford, university city, a nebulous conglomeration of skylines, meadows, hills and people and a baffling harmony of wines in cellars, sounding bells, smells of cars, medieval leather manuscripts warm to the touch, white gold walls.

You are livery on a fine day in early spring. All your creatures wake up from deep motionless sleep and revive their lives, responding to the first warm south wind. The breath of spring is felt in every quarter.

You are gorgeous on a heated morning in the summer. Your Georgian college walls and Victorian gardens are decorated by the many gay colours of roses and purple wisteria.

You are intimate at dawn in summer. Narnian lamps on New College Lane light up the surrounding darkness, as the sign of life, glowing purple, breaks through at the edge of South Park. Your gracious St. Mary's, Bodleian, Camera and Sheldonian are silent, halting after the intense activity of daytime. You are resting, embracing the sound and peaceful breathing of your sons and daughters sleeping at your bosom.

You are beautiful early on a September afternoon. You enjoy your serenity after the tourists before the students. The sky is becoming bluer and more distant. The autumn sun's crystal rays dance with swaying green leaves in playful breezes, playing hide and seek with its beams and shadows on the spacy, tranquil Woodstock Road. A cyclist passes under the tunnel of rustling trees, leaving behind the sound and radiance of autumn.

You are solemn at dusk in late autumn, viewed from the hill of Elsfield. A huge, round, red sun sinks behind your skyline. The colours of the clouds, lingering in the sun, gradually change from dim white to pink and then to thick ultramarine and finally vanish into darkness. While day and night compete on the west horizon, you draw

■編集部からのお願い■

このニューズレターはOCRという機械を用いて、皆様の原稿を直接コピーへのように読み込んで編集しています。つきましては、投稿原稿はワードプロセッサで、できるだけ鮮明な印刷をお願いいたします。

FIRST BRITISH COUNCIL INTERNATIONAL BRITISH
STUDIES

"CHANGING BRITAIN" CONFERENCE

TOKYO 22-23 September 1993

your own silhouette, harmonizing with
the changes of the canvas. Your spires
and pinnacles, with their gothic nobility
uplift you. You - floating in dim light
at dusk - lift only St. Mary's soaring
spire above a layer of white mist. It
looks as if you remain to be the last
witness of the heavenly world.

You are romantic on a morning of snow.
Addison's Walk is virgin to any
footprint, save those of deer and
squirrels. Your brook alongside the
Fellows' Garden draws in White crystal
powder in unusual silence. Ducks on the
Brook are freezing, motionless.

Farewell my alma mater.

You embraced and nurtured a half-fledged
uprooted student from the East, with
such gentle and benignant arms, just as
you yourself are protected by Boar's
hill and the hills of Commoner and
Elsfield and fostered by the Isis and
the Cherwell.

You have been an ecclesiastic body from
your inception. 'Dominus Illuminatio
Mea' was, is and will be your spirit.
How many prayers have been dedicated to
your Lord, soaring high above the spire
of St. Mary's through the centuries? The
last enchantment of the Middle Ages is
still whispering behind the walls of
chapels and churches. Tradition is
stronger than thought. Your Genius Loci
has been secretly leavened into your
people's souls, so they can rise
intellectually sincere and spiritually
deep. Blessed are your sons and
daughters who have been disciplined and
enriched in your bosom. Your frontier
spirit, solid argument and graciousness
will be theirs. May you remain the
lengthened shadow of a man, a witness of
the quest for Truth, until the day
comes, when you rest in eternal peace.
Farewell Oxford 'Vineyard of the Lord'

(Professor Kei Chiba, 北海道大学文学部)

British Studies as a multidisciplinary enquiry is not particularly well known or understood in Japan. To be sure, a course in British Studies has been offered at Tokyo University for the past 40 years but this is rather the exception than the rule. Since a major element in the mission of the British Council is to encourage a better understanding of contemporary Britain, it seemed time for the Council to take a lead.

First, however, what is meant by British Studies? Our working definition is the study of contemporary British culture, society, institutions and achievements. This means that British Studies goes beyond the traditional study of English language and literature in at least two ways. It includes other major subject areas such as politics, law, education, social policy, international relations and economics whilst not, of course, excluding literature and the arts. Secondly, the focus is primarily on contemporary Britain.

A conference seemed effective means of highlighting the Council's interest in British Studies, for encouraging public debate of the issues involved and for identifying those scholars on the Japanese side with an interest in the field. A deliberately ambiguous theme, "Changing Britain", was chosen for the conference. It would be interesting to see how specialists in the different subject areas approached this topic from the standpoint of their own disciplines.

The conference took place in the British Council, Tokyo, 22 - 23 September 1993. It drew a capacity audience of some 120 academics from a wide range of disciplines and institutions. A number of well-known specialists from both U. K. and Japan assembled under the overall chairmanship of Professor Hisaaki Yamanouchi of Tokyo University. Professor Yamanouchi also gave the opening keynote speech, setting the tone for the whole conference.

Baroness Tessa Blackstone, Master of Birkbeck College, University of London, discussed the impact of government policy on British education system. Professor Ken Newton of the University of Essex did likewise for the political system. Piers Gardner, Director of the Institute for International and Comparative Law, gave a brilliant account of the British legal approach. Professor Michael Wheeler from the University of Lancaster gave a wide-ranging talk covering literature and the arts and the question of multidisciplinary. Professor Nicholas Deakin of Birmingham demonstrated, with the help of the overhead projector, the effects of current social policy in Britain. There were also key presentations from Japanese scholars. Professor Kibata of Tokyo University talked about the changing pattern of Britain's international relations and Professor Kusamitsu, also of Tokyo University, covered the British economy.

A particularly important session was the panel discussion of course design. This was led by Professor Susan Bassnett of the University of Warwick, who is well known for her work in the field. The other panelists were Professor Yamanouchi and Professor Wheeler. Descriptions

■ニューズレターのタイトル募集■

BCJA Newsletterになにか良い名前
をつけてください。編集部まで御一報
 くだされば幸いです。

and discussion of the programmes at Warwick, Tokyo and Lancaster led to a lively question and answer session with the floor.

BCJA members were well in evidence at the conference. In particular, Professor Ando was able to take time out from his busy schedule to attend the first day's session and Professor Kawai proved to be a stimulating chairman to the British political scene.

As a contrast to the academic sessions, a well attended reception was held on the first evening. The British Ambassador, Sir John Boyd, gave the "kampai" and affirmed the Embassy's interest in and support for the development of British Studies in Japan.

The conference was voted a great success by the participants but like all such events, raised more questions than it answered. The principal of these, of course, is "where do we go from here?". If you have a proposal for collaboration activity in the field of British Studies or if you are already running a course in British Studies, then the British Council would like to hear from you.

(Dr Martin Phillips, 25 October 1993 ; Dr Martin Phillips is Head of Education Services in the British Council, Tokyo, and in charge of education promotion and British Studies.)



■編集後記■

私たちのニュースレター第1号、無事出航です。ミスター・バレットBC駐日代表、安東BCJA会長をはじめ、予想外に多くの会員の皆さんからご寄稿いただき、なかなか読みごたえのあるものになったと思います。本当にありがとうございました。

第1号は、BCJA事務局の吉田さんが原稿を集めてくださり、平編集委員（東京女子医大）が、お忙しいなか手術の合間をぬりようとして、マッキントッシュで製作してくれました。印刷・発送はブリティッシュ・カウンシルのご協力を得ました。心より感謝します。

今号は、古くは60年代から、新しくはつい昨年まで、人それぞれの英国留学の思い出を笑に楽しく読ませていただきました。次号からは、これに加えて、皆さんの最近のお仕事のことなどについても、ぜひご寄稿いただければと思います。また、簡単な近況報告や情報提供も《はがき通信》でお願います。詳しくは、2ページを見てください。

それから最後に、私たちのニュースレターに、何かいい名前をつけてください。ご提案は9月までに事務局へ。

(編集委員 安藤正人・国文学研究資料館)

北海道支部活動状況

北海道支部が設立されたのは1977（昭和52）年4月のことで、それからすでに17年近い年月が経過した。その間会員数は転勤などで若干の移動はあるものの、ほぼ20名強というきざやかな会である。小沢保知支部長（北海道自動車短期大学学長、北海道大学名誉教授）をはじめ札幌在住者が多いが、会員は全道一円にわたっている。

支部の活動は発足当初から、英国からの著名な研究者またBC関係者などの来道に合わせて、講演会や懇親会を年間2回程度開催することが主なるものである。また支部会員の半数程度は北海道日英協会にも加入しており、この二つの組織の共催になる会合もまれでない。さらにここ数年その数が増加しているJET2プログラムで滞在中のAET（英語指導助手）の諸君が合流したこともある。

これらの会では、小さな支部ながら日頃必ずしも顔を合わすことができない会員たちの思い出話に花が咲いたり、英国に関する最新の情報が交換されたりと、同窓快運側面が造ることが多い。しかし、それだけにこの会の活動活を終らせることは惜しく、会員の持てる知識を広く社会に還元しようと、公開講演会を札幌で開催したこともあった。

会員一人ひとりと、BCの幹線で北海道大学に勤務する英国人教師が担当したこの会は、数多く集まった聴衆になかなか好評であったが、その後継続していないのは残念である。会員が多忙であることやこの種の講演会が今日ではよく開催されることなどが、断ち切れになった主な理由であるが、今後も何らかの新しい活動を加味したいと模索している。本部や他支部のみなさんご協力をお願いするものである。

(北海道支部 浪田克之介)

BCJA事務局よりお知らせ

現在、本年度の入会者12人(2月までの)を含め、会員総数は825人となりました。支部は、札幌、名古屋、関西、九州にあり各々独自の活動を行っております。また、専門によりブリティッシュ・カウンシルの担当官の求めに応じて協力しております。今年度の年次総会および懇親会はブリティッシュ・カウンシルの駐日代表の款送迎会を兼ね、英国大使 Sir John Boydのご招待により大使公邸において昨年10月1日に開催されました。遠くは北海道、九州より約150人の参加者が旧交を温められ、大変盛会となりました。パーティの席上、皆様より大使へ花束を、Jocelyneご夫妻に御挨拶として浮世絵を2枚、Barrett夫妻に歓迎の意を表しプレゼントを安東会長より贈呈され、雰囲気が大いに盛り上がりしました。

全国の会員を対象にBCJA独自のプログラムを企画することは大変困難です。そこで、昨年委員会においてBCJA Newsletterを発行することを決定いたしました。つきましては、会員の皆様に多大なご協力をいただき、現在約90万円のご寄付を頂きました。印刷、発送につきましては、ブリティッシュ・カウンシルのご協力を頂きましたことをご報告申し上げます。プログラムや企画につきまして皆様よりのご意見をお待ちして降ります。